



「緑陰」題字

本庄第一高等学校 本元彩乃

第7号

平成26年12月12日発行

一般社団法人
埼玉県私立中学高等学校協会
〒330-0063
埼玉県さいたま市浦和区
高砂4丁目13番20
電話 048-863-2110
HP
www.saitamashigaku.com

今こそ義務教育無償の理念に立ち返れ

一般社団法人 埼玉県私立中学高等学校協会会長 小川 義男

私立高校にも、相当高額の補助金が出されている。特に埼玉県の場合は、全国トップクラスの「父母負担軽減措置」が確立されている。議会、行政の配慮、高配に深く敬意を表する。

だが私立中学校には、補助金の額も少なく、父母負担軽減措置もない。高額の授業料を徴収しつつ「只の公立中、高等学校」と競わなくてはならない。

ところが、憲法二十六条は「義務教育は無償とする。」と定めている。義務教育である筈の私立中学校が、「義務教育でもないのに只」の公立高等学校より冷遇されている。これは、おかしい。

県内の私立中学校に、現在、学年当たり三千人、三個学年で、九千人の私立中学生がいる。このすべてに、公立中学校に対すると同額の公費支出を行

っても、県の財政に損失を生ずるわけではない。なぜなら、私立中学生が増えた分、それだけ公立中学校の生徒数は減るからである。

憲法は「義務教育は無償とする」と定めるが、私立中学校は義務教育の範疇には入らないのか。

面白いことがある。高等学校と違って、私立中学校の生徒に対して、教科書は無償で支給されているのだ。どうして只なのか、「義務教育は無償」だからである。

憲法十四条の、「法の下に平等」の原則に照らしても、教育に対する公費支出に甲乙があつて良い筈がない。増して「義務教育は無償」の筈なのだ。

全国規模で、この無償の原則を貫いても、私立が増える分、公立は減るのだから、憲法二十六条の原則は、全国

規模で貫ける筈だし、貫くべきである。もつとも現在の支配的な憲法学説では、「無償とは公立学校における授業料不徴収の意味だから、私立が授業料を集めることは差し支えない」と言う事であるらしい。これはおかしい。

実は憲法二十五条の、「健康で文化的な最低限度の生活の保障」も、それを根拠に権利要求することはできない、とされていた時代があつた。二十五条は、国家が目指すべき、理想、目標を定めたものであつて、それに基づいて具体的な権利請求することはできないとされていたからである。これが「プログラム規定」と称される「権利ならざる権利」の規定である。

ところがどうだ。この二十五条に基づいて今は、生活保護法など、具体的法律が用意され、日本は世界有数の「社会福祉国家」として存在しているではないか。

生活保護の予算が、防衛予算と肩を並べるに近いなどという国は、世界に例が少ない。国民の一部には、「働かない方が暮らしが楽になる」という怨嗟の声もある。「働かざる者食うべからず」は社会主義国家の、少なくとも「建前」ではあつた。だが今の我が国では、「むしろ変に働かず、生活保護をもらった方が、良い暮らしができる」との声さえ聞かれるのである。そこへ持つてきて、政府は（現政権

ではないが）義務教育でもないのに、公立高等学校の授業料を只にした。これに伴う国家支出は、私算では年間五千億である。公立高等学校生徒に対しては、このほか生徒ひとり当たり年間百万円程度の公費が支出されている。累積赤字千二百兆円という債務国家

にあつて大切なのは、可能な限りぎりまで「受益者負担」の原則を貫くことである。当時の高等学校保護者が、月額一万円の授業料負担に耐えられなかったとは考にくい。それなのに、あえてこれを只にしようとする動きの中に、私は、当時の政府の、政権を維持しようとする利己心を感じるのである。

当時の政府は、全国の高速道路を只にすると主張していたし、莫大な額の子ども手当も政策として提示されていた。いずれも画餅に帰したが、そのような冒険政策に比べれば、私立中学校教育費の国家負担など、まことにささやかな願いではない。

重ねて言う。私立が増えた分、公立中学校の生徒数は減少するのだ。公立は無償だが、私立は授業料を徴収して良いなどと言う、判例、通説の立場は今や完全に古い。それは我が国が、飢餓状態にあつた時代の思想的残り滓である。

埼玉県こそ「義務教育無償」の憲法原則を貫き、我が国公教育先頭を切るうではないか。

私の生い立ちにかかわる教育

埼玉県議会自民党私学振興懇話会会長 小島 信 昭

県議会自民党私学振興懇話会でのたび会長をつとめさせていただく事になりました、さいたま市岩槻区選出の小島信昭と申します。もとより浅学非才な身ではございますが、会長の責務を全うできますよう全力を尽くしたいと考えております。

私は昭和40年に当時の岩槻市大字掛というところで小島家の長男として生まれました。代々続く農家の14代目なんだそうです。現在は政令指定都市さいたま市の一部となりましたが、現在でも私の家の周辺は、まばらな人家と水田・畑がほとんどです。母が嫁に来た昭和39年頃は、3^{キロ}近く離れた元荒川にかかる慈恩寺橋をわたり北上し、小島家に向かうのですが、対向車らしきものが見えると橋の近くで車をやり過ぎさないとその間ですれ違いが出来ない辺鄙なところで、親戚の方からこんなところに嫁に行つて大丈夫か、といわれたそうです。私も子供のころ、思い出してみますと、小学校高学年になるまでは藁ぶきの、南側に馬小屋が出ているL型の家でした。さすがに馬

や牛はおりませんでしたが、鶏・アヒル等を飼育していたことを思い出します。

祖父・母が中心的に農作業を行い、父は会社を務めながら農繁期に会社を休み農作業をし、家計をやりくりしていたようです。私は家の廻りの作業や炊事をする祖母に育てられた、いわゆる「おばあちゃん子」だったのかと思います。近くに同学年の子は何人かおり、昔の子供らしい遊び（鬼ごっこや缶けり等）に遊び耽っていました。また古い村ですので、伝統行事や古い慣習などが当時は今より残っており、祖母や母の後について大人の付き合い、村の付き合いを垣間見ました。今より住民同士のきずなは強く、何事にも相談し協力しあう、お互いを気遣う気持ちを共有していたのではないかと思います。反面祖母の教えをはじめ、農村の空気は人より目立つ事をしない「他人と違った事をするな・昨年と違う事をするな・」というような掟ではないが、農村生活での常識・農業での経験値からくる常識がありました。昔の農

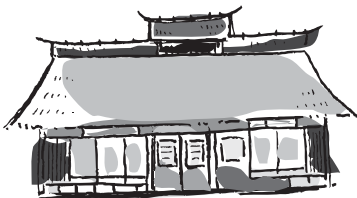
村においては、前述のような常識・意識が村を支配し、大きな冒険を避け、ある意味秩序的な生活が村の運営や家族の運営の中心にあったものではないでしょうか？

そういったある意味、超保守的な育ち方をした私は、小学校・中学校・高校と進むなか、世間の荒波に大きくもまれたのは言うまでもありません。私は地元の河合小学校に入学しました。リーダーシップも一切なく、勉強も出る方ではないし、運動は苦手（当時は肥満体）で何をやっても良くできない、何も良くできないから失敗すれば目立つので、失敗するような事を出るだけ避ける私は、「他人と違った事をするな・昨年と違う事をするな・」をしつかり実行し、クラスでも目立たない存在ですごしていました。努力もしない無気力な生徒だったんです。

ところがこの学校生活を大きく変える先生が赴任してきました。卒業生であり、いわゆる熱血先生が担任になりました。今では考えられませんが悪いことをするとすぐビンタされました。良くできたり良いことをすれば良く褒める先生でした。体育の学習時間鉄棒で逆上がりの課題となり、何週間かクラスの全員で取り組みました。最初は50人のクラスで十数人くらいは出来なか

ったのですが、回数を重ね、数週間たつと全くできない生徒は数人となりました。とうとう最後には私だけとなりました。さすがの熱血先生も一人だけのために授業はできない、と判断し休み時間や放課後を使ってクラス全員で「小島に逆上がり出来るようにしろ」と命令が下り、来る日も来る日も友人たちに校庭に引っ張り出され、逆上がりの練習にあけくれました。もちろん一日や二日で出来るようになる訳もなく、一月近くかかったように記憶しています。ただ出来た時の喜びや感動は今でも思い起こすことが出来るし、その時のクラスの仲間の本人以上の喜びようも記憶に深く刻まれています。

自分の壁は自分で作ってしまう。その壁を打ち破るには自分の努力しかない。壁を壁と考えるのではなくチャンスと考える。考え方次第で道は開ける。この体験から生き方がまるつきり変わったわけではありませんが、その後の私の人生で子供のころの二つ教育・体験が現在の生き方に大きく影響したようです。



乾酪物語

中高協会会長 小川 義男

少年時代、分厚い「イギリス童話」を、繰り返し繰り返し読んだ。大人になり、イギリスを訪れるようになって、その中に出てきた地名が、すべて実在することを知って驚いた。私のイギリス好きは、このあたりから始まっているのかも知れない。

王子様とお姫様の「駆け落ち話」に、胸がときめいた。体が小さな割に、少しませていたのだろう。

お姫様が言う。「あなた、二人で遠くへ逃げましょうよ。広い牧場で、あなたは牛を飼いませな。私は、その乳で、牛酪や乾酪を作って差し上げますわ。」

「月の沙漠を遙々と 旅の駱駝が行きました」という歌は、その頃も流行っていた。このラブロマンは、「軍国少年」の胸をも打った。

だが「牛酪」と「乾酪」の何たるかは分からない。

バターが「配給」になった。初めてバターを食べて、「これが牛酪だ」、私は膝を叩いた。だが「乾酪」の方は

さっぱり分からない。「酪と言うのだから牛乳だろう。それを干して固めるというのだから、それは旨いだろうなあ」想像は果てなく広がるが、乾酪の何たるかは分からない。「乾酪」は、配給にもならなかった。

歳月が流れて、私は22歳の大学生であった。高卒と同時に中学校の英語教師になり、四年の後に進学したのだから、いささかひねた、大学一年生生だったのである。

同じ研究室に、クロバーバターの重役の息子がいた。戦後の独占禁止法により、「雪印」は、雪印乳業とクロバーバターの二つに分割されていた。

そのクロバーの「重役の息子」が、ある日、美しい銀紙に包まれた、塊を取り出したのである。サッカーボールを小さくしたような大きさであった。それがチーズの塊であった。「チーズって言うんだ」、彼は説明したが、その香りが流れてきた瞬間に私は、「これこそ乾酪だ」と分かった。ナイフで切ってもらって食べると、それは、六

年生の頃の私が想像していたと同じ、まさしく「乾酪の味」であった。

後日談がある。歳月は更に流れ、私は三十五歳、明治大学法学部夜間コースの学生であった。働いているのだから、暇はないが金はある。一夕、私は御茶ノ水駅前の「豪華レストラン」で食事を注文した。料理の名前は忘れた。

届いてみると、実に旨そうな匂いが漂うが、いかなる種類の食べ物であるかは分からない。驚いたのは、その食べ物、フォークの先にくつついて、驚くほど伸びる事である。私は驚いた。納豆だって、こんなに伸びたりはしない。およそ人間の食品で、これほど伸びるものがあるだろうか。だが、匂いは実に旨そうである。しかし伸び方が普通でない。私は、「これは、フライ

パンの上の方に置いてあった輪ゴムのひと箱が、料理の上に落ちたのではないか」と思った。そうでなければ、こんなに伸びる筈がない。これは異常だ。

しかし匂いと言ひ舌触りと言ひ、実に旨そうである。店長を呼んで確かめようかと思いつつも、私は全部食べてしまった。後で人に尋ねると、それは明らかにチーズ料理のひとつであった。私は「店長を呼んだりしなくて良かったなあ」と思った。

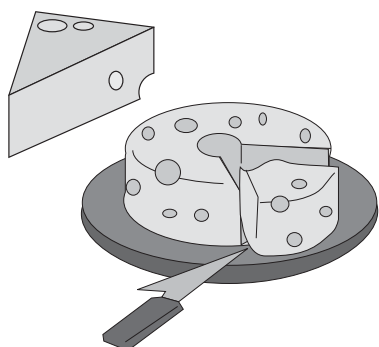
外国の食べ物に日本人が慣れ始めた

のは、この頃だったのではないだろうか。以来チーズは、私の大好きな食べ物のひとつになっている。

チーズは実は「醍醐」として、可なり昔から我が国に存在した味であるらしい。「醍醐味」という言葉は、このあたりの背景を物語っている。

「文明開化」は、我が国の食べ物事情をも一変させた。1945年の日米戦争の敗北は、これを更に加速した。バター チーズ マヨネーズ ソースその他様々な食品が生活を変えさせた。肉、牛乳の消費量の急激な増大も、体位、体格の急速な向上、平均寿命の伸長等をもたらした。まさに革命的な変化だったと言える。

その革命的变化の中で、我が国伝来の思想や伝統も変化、衰微してしまっただのではないだろうか。チーズに手こずった、自分の青年時代が、懐かしく思い返されるのである。



埼玉県公立中学校の

進路指導について思う

中高協会副会長 近藤 文彦

県内私立高校の人数

埼玉県では、県内中学3年生で全日制高等学校に進学を希望する生徒達の約65%に当たる数を、公立高校の募集人員として定めています。しかし、残りの約35%が県内私立に進学する訳ではありません。県外私立を選択する生徒もいるからです。埼玉県から配付された資料によると、県内中学卒業生が県内外の私立高校（全日制）に通う割合は、平成元年度は県内19・8%、県外14・6%でした。それが平成25年度は県内26・9%、県外7・5%。県内私立に通う生徒達が大幅に増えました。また、平成22年度より、公立高校の授業料は原則無償化されました。それが私立離れが繋がると懸念されましたが、実際はむしろ私立に通う生徒が増えました。同じ資料によると、県内中学卒業生が県内私立高校（全日制）に通う割合は平成22年は25・9%、平成25年度は26・9%でした。

これらの事実は、県内の生徒・保護者の皆様の、県内私立高校に対する信

頼が年々厚くなっていることを表しています。公立高校は教育委員会に統括

されています。故に、各学校単位で教育内容に創意工夫を加える事には限界があります。それに対し、私立高校は公立と大きく異なり、創意工夫に富んだ教育を展開しています。それぞれの私立には「建学の精神」があり、各学校はそれに基づき独自の教育を展開しています。例えば、生徒それぞれの特性に応じたクラス編成、その目的に沿ったカリキュラムを展開しています。このようなきめ細かい教育内容を、生徒・保護者の皆様が学校選択の際に評価されているのでしょうか。

ところで、県内の各私立高校が学則定員枠を増加する事は、現在は難しい状況です。つまり、入学希望者が多くなっても入学者数は限られています。そこで、多くの入学希望者の期待に応えられるよう、本年4月14日、中高協会の小川会長が知事に対し、学則定員枠を増やす要望を行いました。（詳細は緑陰第6号に掲載）

不十分な進路指導

各私立が創意工夫をこらした教育を展開しているという事は、生徒・保護者の皆様には分かりづらい面も出てきます。そこで、各私立は数多くの説明会を開き、各校の特色や生徒のスクーリング、進路状況、そして入試情報等を説明しています。受験する私立は2、3校と思われまので、生徒・保護者の皆様は各校の特色をご理解の上、受験されている事と思います。しかし、公立中学で進路指導に携わっている先生方が、生徒・保護者の皆様の求めに応じて、各私立高校の特色を説明できるよう熟知しているかといえ

ば、はなはだ心許ない状況です。公立中学校の生徒の3分の2程度が私立高校を受験するという実態を踏まえた進路指導があつてしかるべきです。しかるに「私立高校の入試制度が分からにくい」という声を公立中学校側から聞くことがあります。これは、公立中学校側が私学の入試制度を把握していないという証左でもあります。現在、50歳代になる先輩たちが、かつては、足を使って私学の入試制度を研究し進路指導に役立てていた時期がありました。私立高校では、一人ひとりの将来に見合った指導を行うため、生徒の志望・特性に合わせた独自の入学試

験を行っているところがあります。ここでは、学科制やコース制を取り入れた上で、生徒の夢の実現に向けて、生徒の個性、特性に見合った独自の教育を展開していますので、そうした状況をよく把握した上で進路指導に生かさなければ、本当の意味で「進路指導」とは言えません。

こうした公立中学校の進路担当教員の情報不足が、生徒・保護者の皆様が塾の情報に頼らざるを得ない状況を生み出してしまいました。また、公立中学の校長先生から何度か伺いましたが、私立だけではなく公立高校に対する進路指導もできない教員も多くなってきたようです。このような状況になった主たる原因が、平成4年度に行われた業者テストによる偏差値の追放です。

埼玉県の偏差値追放

ここで、これまでの中学校の進路指導と業者テストの関係について説明します。

平成4年9月県議会で「業者テストの取り扱い」についての一般質問がありました。当時の県教育長は「業者テストの偏差値に過度に依存した進路指導を改善する姿勢」を明確にし、「公立中学から業者テストの偏差値等を高校へ提供しない」、「中学校が業者テ

ストの実施に関与しない」といの方針を打ち出しました。

翌年には、文部省（現文科省）事務次官名で高等学校における入学者選抜の適切な実施が図られるよう、「高等学校入学者選抜について」（平成5年2月）という通知が、各都道府県教育委員会・各都道府県知事宛に出されました。

この通知では、「業者テストの偏差値等を用いない入学者選抜の改善」の項目で、「業者テストの偏差値等に依存した進路指導を行わないこと」、「中学校は業者テストの実施に関与する事は厳に慎むべき事」を求めています。また、「中学校における進路指導の充実」の項目では、「生徒の進路の選択や学校の選択に関する指導は、偏差値に頼って行われる事がないよう。」求めています。

こうした状況を受けて、埼玉県の公立中学では業者テストが使われなくなり、同時に偏差値も使われなくなりしました。そして、その代わりに登場したのが、文部省通知の趣旨を踏まえた公的（校長会）テストです。

この公的テストは、現在県内を幾つかの地域に分けて、そのグループごと

に実施しています。また、偏差値を生徒に明示しないために、受験生の立場では希望校と自分の学力の乖離が分かりづらい。この為に、結局は塾で業者テストによる偏差値に頼った指導を受けているのが現状です。

文部省通知では、公立中学校が高校に業者テストを提示する事は禁止しています。また、業者テストの偏差値等に依存した進路指導も禁止しています。しかし、業者テストの偏差値を参考にした進路指導まで禁止しているわけではありません。

そもそも、進路指導とは端的に言えば、生徒の進学や卒業後の職業について指導・助言を行う事です。私もかつて高校3年生の担任として、進路指導を行った経験があります。明確な将来展望を持った生徒もいれば、それが漠然としている生徒もいるなど生徒の状況は様々です。たとえ漠然とした将来展望であっても、少しでもそれに近づける大学に合格できるような指導を私は心がけていました。その為には、幅広い受験生が受ける業者テストを無視する事はできません。大学受験と同じように高校受験も、各校に応じた一定の学力が必要になります。公立中学校から偏差値を追放した結果、進路指導だけではなく進路指導も崩壊しました。

本来の進路指導に向けて

中国が建国当初、文化大革命以前の時代、雀の駆除運動が実施されました。お米を食べる雀は人民の敵だからです。結果として何十万羽の雀が駆除されました。しかし、雀の駆除はウンカ（稲の害虫）などの害虫の大量発生を招き、農作物は大打撃を被りました。雀はお米も食べるのと同時に、ウンカなどの害虫も食べていたからです。偏差値と雀を同一視はできませんが、物事を一面だけで判断し、後で大きな災いを招いた点は共通しています。

この件については、県教育委員会もある程度の危機感を持つてもいいのではないのでしょうか。本年度より「埼玉県進路指導改善検討委員会」が設置されました。どのような改善が提案されるか楽しみです。

昨年、大手新聞に載った意見で気になるものがありました。抜粋ではあります

「ある中学校から公立のA高校を受験した生徒の約半数が不合格になった。その高校に合格するためには、一定以上の学力が必要である。受験校は本人と保護者の希望が尊重されると言えは聞かぬが良いが、中学校での進路指導とは何をするのかという疑問に行き着く。出さなくても済む不合格者は、出

して欲しくない。」

この文面の中学校がどの県かは分かりませんが、公立中学の進路指導に対する疑問が浮き彫りになっています。教員が生徒・保護者に不合格になる可能性が高い事を伝えた上での受験なら、生徒のチャレンジ精神の結果といえます。私も大学受験の進路指導で、そのような事は何度も経験しました。中学・高校ともに、生徒・保護者の意志は尊重されるべきものです。しかし、公立高校が求める学力と生徒の学力との乖離が非常に大きい事を知らずに、あるいは後で苦情が寄せられるのを避ける為に受験させたなら、その進路指導には問題があると言わざるを得ません。

現在、埼玉県の公立中学の進路指導は、平成5年の文部省通知に過度に反応し、本来は参考にすべき業者テストの偏差値を放棄しています。その結果、塾の進路指導が台頭しているのが現状です。埼玉県民にとって好ましい状況ではありません。塾を否定するわけではなく、塾はクラス担任が行うのが自然です。塾はその補完的な存在として、必要な人が利用すればよいものです。

「埼玉県進路指導改善検討委員会」の改善案を刮目して待っています。

「日本の教育を考える」

中高協会副会長 青木 徹

年々、世界が大きく変わっていきま

す。私が中学生、高校生のころは、現在あるようなパソコンもなければ、インターネットもありませんでした。新聞や書籍も紙ベースの本から電子書籍に変わりつつあります。手紙はメールに変わり、インターネットでさまざまなものが買えることが出来、支払いもインターネットを通して行えるようになりました。それに伴って私が中学・高校生のころにはなかった新しい職業がたくさん生まれました。

このように世の中がどんどん変わっていくと、20年、30年後には、現在なかったものがたくさん生まれ、現在ある職業がなくなり新たな職業が生まれます。

すると、今、学んでいることが役に立たないというようなことがたくさん起きてきます。ということは、学校で学ぶことは世の中がどんなに変わっても、使える学び、新しい時代に対応できる創造力や、探究力、新しいものを取り入れることのできる学びなど、いつの時代でも使える力を学校で学ばな

ければなりません。

ところが、日本の学校の多くは知識や計算の仕方などを教えるだけで、考え出す力や創造する力、発信する力をつける学びをあまり行っていません。もちろん読み書きそろばんは大切です。創造力や発信力、思考力を育てるには土台となるしっかりとした知識が重要です。しかし、それだけでは劇的に変化する21世紀に対応することはできません。

そこで、私たちは学校の教育の仕方、あり方を変え、創造力、探究力、発信力、コミュニケーション力などこれからの世の中に対応できる学力をもった生徒を育成する必要があるのです。

一方、「日本の若者が内向きになったとか、チャレンジしなくなった。」といわれていますが、私は、日本の学校教育の在り方が原因のひとつになっていると思います。

一定レベルの教育を集団で指導し、学力を上げるという意味では、戦後の日本の教育は大きな成果を発揮したと

思います。しかし、それは、生徒一人ひとりの能力や個性の違いなど配慮せず、大量生産、ベルトコンベア型、画一教育でした。しかも授業の多くは、教師が生徒に一方的に講義をし、生徒はそれを聞きノートに写すという受動的な学びでした。このように、子供たちは小学校から高校まで受身の教育を受けていて、どうしても主体的に活動できる人材が育つのでしょうか。

ところで、生徒が主体的に学ぶ教育については、心理学者・教育学者であるビゴツキーが『思考と言語』の中にある「発達の最近接領域」で、ブルナーは『教育の過程』で「学びの構造化」として、子供たちの可能性や、能動的・主体的に学ぶ実践的な教育について論じています。

現在はこのような、学びを総称してアクティブラーニングといいます。生徒が主体的に考え、能動的に学ぶ学習としては探究型の授業や、協働型の授業がその代表的なものです。探究型授業では教師が授業で解決していく疑問・課題を提起し、生徒はそれを考えます。そして教師と生徒たちとの双方向のやり取りを通して、教師がそれをもとめながら、一步一步授業を進めていきます。教師は生徒達の質問や発言を

通して、どこが理解されているか、されていないかを確認しながら授業を進めていきますので、ほとんどの生徒が学習内容を深く理解するだけでなく、思考力、発信力が高まります。

また、協働型（学び合い型）授業は、教師が疑問・課題を提起し、生徒たちはグループをつくり、それまで学習した内容や知識と教師のアドバイスを基に、疑問・課題を解決するために、一人ひとりが考えを出しあい、検討し、論議し、課題をまとめて発表します。この学び合いの中で、互いの思考が深まり、創造力、探究力、コミュニケーション力が高まり、さらに、疑問・課題の解決法をグループごとで発表すること、発信力が高まります。

幸いにも、埼玉の多くの私学では生徒が主体的に学ぶ授業を実践しています。こうした学びを通して、生徒たちは主体的に学ぶ楽しさや、物事の本質を学んでいます。生徒たちのこうした学びで獲得した力が社会に出てからも役に立ち、どのような世の中になっても対応出来るのであります。

埼玉の私学で学んだ生徒たちが、豊かで平和な社会の実現に貢献できる人に育つことを願っています。

「青少年交換留学生と埼玉私学保連」

埼玉県私立小学校中学校高等学校保護者会連合会会長

島村 健

八月から、アメリカのフロリダから青少年交換留学生として、男子高校生をホームステイで受け入れています。

国際ロータリークラブの事業で、埼玉県には二つの地区があり、第二七〇地区（南東地区）では、今年度、一、二カ国に二、三人の高校生を派遣し、一、一カ国から一、七人を受け入れています。そして県内の私立高校には3名通学しています。

最初に受け入れる家庭としての、第一ホストファミリーは初めてで、受け入れに当たっては、学生の健康、通学、校友などの心身両面の安全を確保する責任を感じています。そして一日でも早く日本の生活に慣れるようお互いの習慣、言語などのギャップをなくすよう心がけています。

どうして留学先に日本を選んだのか質問すると、「文化の違いを知るために生活してみたかった。それには、アメリカから一番遠い日本の文化が一番違うと思った。」と、興味を持ったようです。日本からアメリカが一番遠い

国とは思っていなかったので驚きました。日本のアニメを見て興味を抱き、インターネットでいろいろ調べ勉強してきました。日本に来る前にはメールで連絡を取っていました。英語と日本語でメールを送っていました。スカイプ（パソコン通信を使った電話）では、箸を上手に使っていました。フロリダの日本食レストランで食べた食事もありました。特に寿司、焼きそばが大好きで、来日してから特別変わりなく普段通りの食事を好き嫌いなく食べています。

生活習慣、来日時のロータリークラブのオリエンテーションでは、日本人は挨拶をととても大切にしており、「日本の生活は挨拶に満ち溢れています。まずは挨拶を学び、自分から挨拶することを心がけてください。」と、教えています。

アメリカでは挨拶はあまりしていません。毎日おはようございます、行ってきます、ただいま、ありがとうなど、大きな声で挨拶するので、

今までは家族では挨拶が少なくなってきたので逆に教えられ、今は意識して朝から挨拶をしているので感謝しています。

アメリカの学校生活でも、起立、礼の挨拶をして授業を始める習慣がないので、先生に敬意を表すことが大切なことだと、改めて理解したようです。

また、大学のように授業単位に教室を移動するので、日本のようにクラス単位での授業は初めてで戸惑ったようです。文化祭や体育祭はないようなので、日本で経験できたことは新鮮でとても楽しかったようでした。来日してまだ二か月ですが、彼は、好奇心とともに積極性を持って、日本語の習得にも熱心に取り組んでいますので、日本での一年が素晴らしいものになるよう期待しているところです。

ところで、アメリカと日本では、このように文化、習慣に違いがあるのは当たり前です。同じように、私が会長をしている埼玉私学保連加盟校の保護者会においても、各校独自の校風や文化があり、それぞれに違いがあります。

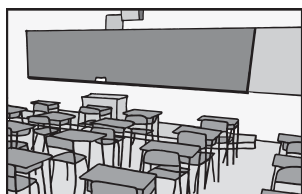
それでも、それぞれ独自に、特色ある素晴らしい活動をしています。埼玉私学保連では、総会や加盟校等代表者連絡会議、研修会のなかで、保護者会の活動を発表していただいて、情報交換や

意見交換を通して少しでも各校の保護者会活動の参考していただきたければと思っています。

埼玉私学保連は平成一九年二月に設立いたしました。加盟校は三八校（四一団体）となっております。

本会の目的は、保護者の立場から、埼玉県私立中学高等学校協会さんと緊密かつ強力に連携しながら（一）私立学校の振興を図ること（二）青少年の健全育成に努めること（三）加盟校の充実及び発展を図ること等に寄与することにあります。

本年は設立八年目になります。設立当初より目的達成のために活動してまいりましたが、特に、公私間格差の是正、学校等経常費助成については、毎年、県の予算編成に対する要望を行っています。また、多くの保護者の皆様に参加いただき、埼玉県私学振興大会を開催いたしております。これからも埼玉県中学高等学校協会さんと連携し、さらに日私学保連と協力して、私学発展のために活動してまいりますので、保護者の皆様のさらなるご支援、ご協力をお願い申し上げます。



ほんとうの学校の教育

中高協会理事 島村 新

英語の学校、スクール (SCHOOL) は、ラテン語の (SCHOLA) という語からくるのですが、その原義は、なんと「暇 (ひま)」ということだそうです。そうしますと、学校の生徒は時間のある「暇人」ということになり、その当然の帰結として、生徒は日常生活のよけいな雑事の心配をすることなく、十分に勉強をすることが可能な存在となるのです。

このことは、ギリシャ時代に奴隷たちの存在によって、当時の人々に時間が与えられたことが、哲学の誕生と結びついた歴史と同様です。

にも拘らず、今の学校の生徒はとても忙しい様子です。そして、その忙しさは、物事を考えるためというのではなく、あれもこれもとやることに追われ、特に「たくさんのことを覚える学習」に終始しているためと思えます。

むろん、物事を考えるための元になることを暗記することはある程度必要です。しかし、勉強が、そのことに終始するようにになると駄目だと思います。どうして覚える学習が常態化し中心に

なってしまうのか。その理由は、やはり、上級学校への進学準備のためということになるのでしょうか。

これでは、単に物事を知識として覚える勉強ということになり、生徒のこれからの人間としての生き方に繋がることを考えるという、いわば人間教育からは、ずっと遠のいたものになってしまっています。

実はこのような指摘は、これまでたびたびなされてきたように思います。しかし、なかなかその改革はなされず、今の教育が、本気で考えねばならない問題となっているのです。

そもそも、教育というのは、一人ひとりの生徒が、本来目指すはずの姿に成長するように手助けしていくことだと思えます。そして、あくまでも主体は考える生徒自身なのです。

十九世紀の北イタリアで、若者の教育に生涯を捧げたドン・ボスコの教育には、教えられることが多いのですが、その教育の中心理念は、アッシステンツァⅡ「共にいること」でした。そのことで、生徒は考えるのです。

私の高校時代の校長先生は、数学の先生でした。そのためか、先生の話には必ず数字が登場しました。いつも、数字に操られた話は、それはそれでたいへん興味深いものではありましたが、いつまでたっても憶えているのは、先生が話の度に繰り返し述べられていた「勉強する目的は何かを自分で考えよ」という一言です。

そして、私は、自分のことで恐縮なのですが、学校では機会あるごとに、校訓に基づいた話をしています。その内容は、「自分の使命を生きているか」と「自分のありのままを生きているか」と「自分はみんなと仲良く生きているか」の三つなのですが、いずれの時も、中学一年生から高校三年生の人ひとりが、自分で考えられるように話しているつもりです。

このようなことを考えるために「暇」を費やしてくれていれば幸いなのです。つまり、真の教育の実現のためには、生徒に何かを覚えるというような忙しさを体験させるのではなく、ゆつくりと考えるために「暇」を費やすようすすめることが大切だと思うのです。

ところで、私は、今年の秋、ひとりの卒業生から、次のような手紙を受け取りました。教育について、励まされ

ること大でありましたので、紹介します。

『私が生徒だったのは、もう三十五年以上も前のことです。当時まだ反抗期をひきずり、人としても未熟だった私たちに辛抱強く、繰り返し、こういうことを伝えようとなさっていたのだ・・・いつ花がさくかはわからないけれど、その日のためにひたすら生徒の心に種を蒔いて下さっていたのだと改めて感謝の気持ちで一杯になりました。もしかしたら現役の生徒の中には、先生のお話がまだぴんとこない生徒がいるかもしれませんが、いつか必ず心に響く日がくるのだらうと思います。』

冒頭に述べましたが、学校教育の中にいる生徒には十分な時間があります。それは、生徒が考えるための「暇」に恵まれているということです。と同時に、先ほどの手紙は、学校教育の中にいる生徒は、教育の時期という点においても、恵まれていることを示してくれています。

生涯教育ということが、言われて久しいですが、私は、やはりこの学校教育に限りない魅力を感じている一人かもしれません。

